キャベツ黒腐病（病原菌：*Xanthomonas campestris* pv.*campestris* ）

○ 被害と発生生態

細菌によって起こる病気であり、幼苗期から結球期まで生育の全期間にわたり発生する。子葉では葉脈の先端の葉縁部分から黄変し、次いで褐変する。その後、葉脈を中心にして拡大し、しおれる。成葉では、初め下葉の葉縁の水孔付近から黄化し、V 字型または不正円形となって次第に拡大する。発病が激しいと、根や茎の維管束に黒変が見られる。

本病原細菌は土壌中で 1 年以上生存し、キャベツのほか、ほとんどすべてのアブラナ科作物に感染する。土壌中の病原細菌は雨滴とともに跳ね上がり、葉縁の水孔や傷口から侵入する。病斑で増殖した病原細菌は導管を伝って広がり、別の部位に病斑を形成する。雨風によっても広がり、周辺の葉に伝染する。また、種皮に潜入あるいは付着した病原細菌により種子伝染する。

発病適温は 15 ～ 30 ℃で、降雨により発生が助長される。

○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

・品種により発病程度に大きな差があるので､常発地では耐病性の品種を選定する（表）。
・51 ～ 53 ℃ 10 分間の温湯浸漬または 70 ℃ 3 日間の乾熱処理などにより種子消毒をする。
・病原細菌に汚染されていない土で育苗する。
・アブラナ科野菜の連作を避ける。
・被害残さは圃場外に持ち出して処分する。

（イ）薬剤防除

・常発地では薬剤を予防的に散布する。台風、大雨後には薬剤散布を行う。
・薬剤散布にあたっては展着剤を加用し、下葉にもよくかかるよう散布する。
・キスジノミハムシ、コオロギ、チョウ目害虫など食葉性害虫を防除する。

V 字型の病斑

表　黒腐病に対して耐病性を有する品種

新藍、いろどり、輝、YR家康、彩風

山口県で栽培されているキャベツの主要品種について、種苗会社のパンフレットをもとに作成